# チョコレート

太美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チョコレート

【Ｎコード】
Ｎ２１１４Ｇ

【作者名】
太美

【あらすじ】
過去のバレンタインはいい思い出の無い私。手作りチョコに気持ちを込めて、彼に届きますように・・・・

私と彼が付き合いだして、初めてのバレンタインがやってくる。
親友のくるみがチョコを手作りすると言い出した。
「だって、気持ちを伝えるんでしょ。だったら、やっぱり手作りじゃん！」
「えぇ～っ、だってチョコ溶かして型に入れて完成でしょ！気持ちなんて入ってないじゃん！」
「これだから、素人は困るのよ！刻み方１つで味も変わるし！」
「そうなの？簡単じゃないの？？？？」
「違うよ！一緒にチャレンジしてみる？」
気は進まなかったけど、くるみの熱弁に負けて一緒に作ることにした。
バレンタイン当日は平日で、普通に授業がある。
でも、５限で終わるので、帰りも早い。直接くるみの家で作ることになった。
材料を購入し、緊張しながら作り出す。
「まさか、なみは初めてチョコ作るの？」

「実は、そう！バレンタインはいい思い出ないから、ちょっと抵抗あるな・・・・」

「振られてばっかりって事？」

笑いながらくるみは言った。

中学の時、大好きだった先輩にチョコを渡そうとしたら邪魔された事。

２年の時は、私が風邪を引いて家から出れずに渡しそびれた事。

３年の時はチョコを渡せたけど、彼がチョコ苦手だった事・・・・・・・

結局、成功した試が無くって、いい思いでもない。

だから、バレンタインはどこか冷めてる。

でも、今年はりょうちゃんがいる。

昨日もメールで”手作りのチョコをあげる♪期待してて♪”と送った。

りょうちゃんからは”すげーっ！楽しみにしてる！”と返事があった。

今年こそはいい思い出になって欲しいと思う、とくるみに話すと大爆笑された。

結局、過去の失敗は私のリサーチ不足らしい。
大笑いされながら、チョコを刻みだした。
刻んだチョコに、温めた生クリームを入れて混ぜる。
キッチン一杯にチョコの甘い香りに包まれる。
絞り口で溶けたチョコを絞りだして冷やし固める。
甘い香りに包まれて、顔までが笑顔になる。
固まった半分に粉砂糖をまぶして、急いで丸める。残りの半分も丸めて冷蔵庫で冷やす。
時間が掛かるので、ここでお茶にした。
「なみは、りょうちゃんと付き合ってどれくらい？」
「えっ！クリスマスからだから、２ヶ月くらい・・・・・」
「そっか・・・・・・」
「くるみは？」
「半年くらいかな・・・・・・じゃ、なみもそろそろだね。」
「えっ？」

「りょうちゃんと、ちゅぅ〜っ♪」

「えっ！くるみはどれくらいだったの？」

「なみ達の頃にはもう、終わってたよ。」

さすが、くるみの彼は年上だけあって、早い！奥手の私には、手を繋ぐだけでもドキドキするのに。

「くるみの彼は何コ上だっけ？」

「えっ？４コだから、ハタチ！大学生だって。」

くるみは、彼とバイトで知り合ったって言ってた。

私とりょうちゃんは、友達の彼が男子校で、その学際についてきて欲しいと誘われて

のん気に付いていくと、彼女はさっさと彼と消えた。

路頭に迷った私に、声をかけてくれたのがりょうちゃんだった。

丁寧に館内を案内してくれて、笑った顔がすごく優しそうだった。

不思議と気があって、メルアドを交換。

何度かメールが来るようになり、そのうちデートになって付き合いだした。

第一印象の優しそうな感じはそのままで、本当に優しい。

同じ歳なのに、ちょっぴり年上に感じる事もあるくらいだった。

その事を言うと、りょうちゃんは

「俺は、オヤジじゃないぞっ！」とか言いながら、顔をくしゃくしゃにして笑った。

そんな事を思い出してると、自然と笑いがこみ上げてきた。

「ちょっと、なみ・・・・思い出し笑いなんて、気持ち悪っ！」

「ごめん、ごめん！そろそろ仕上げの時間じゃないの？」

慌てて、冷蔵庫に入れてたチョコを出し、粉砂糖のついてないチョコをテンパリング。

そのまますぐにココアの粉をまぶす。

やっと完成した。

「なみ、どうよ！以外に難しいでしょ！」

「本当！簡単って思ってたけど、かなり手間隙かかるのね！」

「でしょぉ～っ！なめちゃ困るよ！っていうか、早くもって行かないと・・・・・」

時計を見ると5時前だった。

急いでラッピングしてくるみの家を出た。

「もしもし、私。今ねくるみの家を出たの。近くまで出てきてもらえる？」

「了解、じゃぁ、駅でもいい？」

「うん、じゃぁ、また後でね」

電話を切った。くるみの家からりょうちゃんの最寄の駅までは、2駅。

あっという間に改札を出ると、りょうちゃんが待っててくれた。

「せっかくだし、ちょっと歩く？」

そう言うと、りょうちゃんは手を差し出した。

そのまま、私の手を重ねると上着のポケットに突っ込んだ。

こうすると、りょうちゃんを近くに感じて大好きだった。

「ちょっと歩くと、河川敷に出るけど、そこまでどう？」

頷くと、河川敷に向かって歩き出した。

今日のチョコを作る工程を説明して、結構手間隙掛かった事を話した。

りょうちゃんは笑いながら聞いてくれた。

河川敷に到着。河川敷はランニングコースや、サッカーが出来るくらい広い公園みたいだった。

川の流れを見ながら座れるようにベンチまで設置してあった。

「あっ、あそこ空いてる！」

空いてるベンチに座った。

「はい、チョコ。多分おいしいよ！」

「多分って何だよ！多分って！」

「だって、初めてだし・・・・・時間が無かったから味見してないし・・・・・」

「えっ！味見無しなの？大丈夫かよ！」

「大丈夫！その分、私の気持ちを詰めてみました！」

「それって、やばくないっ？」

「じゃ、あげないよっ！」

「ごめん、ごめん！冗談だって。食べてみてもいい？」

そう言うと、りょうちゃんはラッピングをほどいて、チョコを食べた。

「どう・・・・・・・・・」

もう1コ食べた。

「ねぇ、どうなの？おいしくないの？？？？」

「教えないっ！」

「えぇ～っ！」

急にりょうちゃんに肩を抱かれた。

その手が少し震えてる。

それでも、力強く私を抱き寄せる。

「ちょっと、どうしたの？」

自然と私の身体は、りょうちゃんに近くなった。

りょうちゃんの顔がすぐ近くにある。

急にドキドキしてきた。

さらに、もう1コりょうちゃんはチョコを口に入れた。

「チョコの味、知りたい？」

言い終わらないうちに、りょうちゃんの顔が近くなる。

どんどん近くなって、私にもチョコの味がした。

甘くて、私の感覚も溶けてしまいそうな甘さ。

りょうちゃんの唇が離れると、私は腕の中にいた。

まだ、チョコの甘さを感じながら・・・・・・・・・

## （後書き）

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。
今後の参考にしたいので、ぜひ感想を聞かせてください。
よろしくお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2114g/

チョコレート

2010年12月11日05時42分発行